インターネットに書かれた「父親の子育て」

松　山　由美子

1．研究の背景

近年、保育所でも子育て支援に関する政策が強化されているが、少子化・核家族化という社会を反映しているのか、厚生労働省のキャンペーンなども功を奏しているのか、家事・育児に参加する父親について語られることが多い。

父親は社会的存在といわれ、その時代の社会のあり方を色濃く反映させた存在である（高橋：1994）とも言われている。しかし、現代の父親像を家族研究や父親研究などの文献から概観すると、「母親と父親の同質化」が問題として挙げられている（読売新聞：1996）ことなどをはじめとして、単に父親の育児時間が増えることが決していいとは言えず、むしろあまり好ましいものとは言えないようであることが明らかになっている。それは、父親が子育てに参加する際、「2人目の母親」になってしまい、「父親らしい文化」を持っていない、つまり、「父親の子育て」ができていないからであることが原因であると述べている（読売新聞：1996）。

父親の育児については、先述の意見をはじめ、さまざまな意見が飛び交っているが、実際にはどうなっているのであろうか。現代の「父親の子育て」像を探るために、インターネットでどのように書かれているかを調べることにより、具体的な父親像や父親たちがどのような子育て観を持っているか検証することにした。

さらに、より本音の父親像に迫るため、今回の検証の対象となる父親像を、テレビか新聞、雑誌などではなく、インターネット上に登場する父親に限定した。

インターネットという媒体は、新聞やテレビなどのマスメディアと違い、個人が自由に情報を発信することができるという点で、非常に興味深いメディアである。生の父親たちが自分の意見や行動に関しての記述を誰の制御も受けることなく書き綴り、発信しているのではないだろうか。そこには、自らが自らの子育てについて発信しているものや、マスメディアが発表した「父親の子育て」に関しての意見などを述べたものなどが存在している。インターネットというメディアの中にこそ、現代のリアルな父親の一端を見ることができるのではないかと考えたからである。

2．研究の目的と方法

2－1　研究の目的

現代の父親像および父親たちが子育てについてどう考えているかをインターネットのホームページより探ることを目的とする。

2－2　研究の方法

インターネットの検索サイトのカテゴリ（ディレクトリ）にどのような「父親」に関するサイトが登録されているかを調査し、リンクをたどり、閲覧することのできたホームページより、記事内容、更新頻度、更新時期など、さまざまな視点から概観する。

3．　検索サイトへの登録状況

3－1　「Yahoo! JAPAN」カテゴリ

検索エンジンサイトの最大手「Yahoo! JAPAN」（http://www.yahoo.co.jp/）におけるディレクトリ（カテゴリ）にどのような父親の育児に関するホームページがあるかを調べてみたところ、以下のような状況であることが分かった。

2003/12/10時点で「父」というキーワードで検索すると518件のホームページが登録されていた。そのうち、カテゴリに登録されているホームページは11件で、父親に関連性のあるものは「生活と文化＞父親」（42件）、「父の日」（2件）、「育児＞ステップファミリー」（3件）、「幼稚園、保育園、託児所」（8件）の、4カテゴリ（57件）であった。

そのうち、父親の育児と最も関連性の高そうな

「生活と文化＞父親」カテゴリに登録されていたホームページについて見てみると、大きく分けると以下のような趣旨のものがあることが分かった。

- 一般的なパパの育児日記、エッセー、コラム
- 専業主夫体験記、育児休暇体験記
- 男性のためのフォーラム
- シングルファーザー
- ビデオ編集講座
- 共働きに関連した法律集作り・父親ネットワーク作りを目指したもの
- 夫婦で子育てについて語る
- 元大学教官が研究的な見解も含めて書く父親や夫婦、家庭のコラム
- 『父親の復権』（林道義）関連
- 日本ファーザーズデイ委員会

＜父だが関係のないと思われる検索結果＞
幼児教育＞教員（10）（保父について）
芸能人、タレント＞イブニング親父。(1)
鉄道会社＞秩父鉄道（1）
埼玉県＞秩父市（97）
愛知県＞祖父江町（17）
埼玉県＞東秩父村（4）
兵庫県＞養父町（9）
北海道＞秩父別町（9）
その他、秩父、ドラマ「転がしお銀　父娘あだ討ち江戸日記」、秩父宮など

さらに、2004/05/20に同じように「父」というキーワードで検索したところ、571件の登録サイト（ホームページ）があることが分かった。5ヶ月で53件の追加があったことになる。また、カテゴリに登録されているホームページも18件（7件増）であった。関連性のある4カテゴリの増減を見てみると、以下のとおりであった。

- 生活と文化＞父親（42）＜±0＞
- 父の日（3）＜＋1＞
- 育児＞ステップファミリー（3）＜±0＞
- 幼稚園、保育園、託児所（8）＜±0＞

しかし、一番関連性の高いカテゴリである「生活と文化＞父親」に登録されたサイトは増減がないことが分かり、父親とは関係ない部分で増えていることが明らかになった。これは、カテゴリではなく、特にスパイダーによる検索結果に言えることだが、検索サイトの技術の進化にともなうノイズの増加が考えられる。つまり、父親とは関係のない、さまざまな「父」のつくものを結果として表示しているだけかもしれない。

また、登録サイト例を前回と比較しても、最近できたというような目新しいサイトも見当たらないことが明らかになった。

3－2　「Looksmart社」カテゴリ

Looksmart社は、Excite（2004年6月より、Jリスティング社のカテゴリを採用）やFresheye、また大手プロバイダの検索ページ等が採用している検索カテゴリ（リンク集）を作成している会社である。登録の際には「Yahoo!JAPAN」のカテゴリ登録と同様、人による審査があり、厳選されたホームページが登録されていると考えられる。

2003/11/18時点では、「父親の育児」で37件のホームページが登録されており、「父親と母親」のカテゴリの中には3件登録されていた。

父親の育児と最も関連性の高そうな「家庭とくらし＞子育て＆しつけ＞育児＞父親の育児」に登録されていたホームページの内容を大まかに分類すると、以下のとおりである。

- 掲示板中心
- パパの育児日記、エッセー、コラム
- 専業主夫体験記、育児休暇体験記
- 夫婦の子育て日記を父親が書く
- 幼稚園の「おやじの会」
- 日本ファーザーズデイ委員会

また、「家庭とくらし＞子育て＆しつけ＞親＞父親＆母親」のカテゴリにある3つのホームページの内容は以下の2つのようなものであった

- 父と母とで一緒に育児を、というコンセプトのもの（母親が主宰）
- 市の任意団体「父親の会」

以上のホームページは、「Yahoo!JAPAN」の「生活と文化＞父親」カテゴリに登録されているホームページとほぼ同じであることが明らかになった。また、

3－3　「goo」カテゴリ（InfoBee）

検索サイトの中でも「Yahoo！JAPAN」と同じぐらい有名で長い歴史を持つ「NTTレゾナン

ト」運営の「goo」のカテゴリでも同様に調べてみた。ここも、独自の登録基準がある。

2003/12/10時点で「父親」で検索すると50件のホームページが登録されていた。うち13件は「シングルファーザー」カテゴリに属しており、「Yahoo!JAPAN」や「Looksmart」のサーファー（審査者）によって選ばれて登録されたホームページとはやや違った傾向が見られた。

なお、1件は「厳選サイト（おすすめ）」として紹介されており、他の多くは「総合情報」カテゴリに登録されていた。2004年8月時点では、1つリンクが外されており、全体で49件（うち13件が「シングルファーザー」カテゴリ）であった。

「くらしと社会＞家族＞父親＞総合情報、ニュース」のカテゴリに登録されているホームページの内容を概観すると、「いくじれんホームページ」や「東京男性保育者連絡会」などの特に父親の子育てに直接的には関連性のないホームページを一部のサイトを除くと、「Yahoo!JAPAN」や「Looksmart」に登録されているホームページとほぼ同じであった。

「goo」が独自に採用しているホームページの1つに「39papa.com」（http://39papa.com/）がある。ホームページ開設当時39歳だった父親が「まだまだがんばる43歳」となった今も、「ベテラン父親への挑戦」と題し、「新米父親の独り言」として育児に関する思いや意見を「育児日記」「写真館」を通して書いている。育児設備リストなどもあり、自分が育児で有意義で必要だと思った情報をまとめて掲載している。

また、「goo」では「くらしと社会＞家族＞育児、子育て＞育児日記」というカテゴリが別にあり、そこには父親が書いた育児日記も収められている。「Yahoo!JAPAN」で紹介されている父親による育児日記の多くがこのカテゴリに分類され紹介されていることが分かった。

3－4　「Jリスティング」社カテゴリ

2004年4月より、ExciteやLivedoor、大手プロバイダ等の検索ページに提供するカテゴリとして、Looksmart社とはまた違った独自のカテゴリを作成している。

2004年9月時点で「家庭とくらし＞生活＞子育て・しつけ＞親＞父親の子育て」カテゴリに6件のサイトが登録されていることが分かった。その6件はいずれも、「Yahoo!JAPAN」か「goo」のカテゴリに登録されている（中には2つのサイト両方に登録されている）有名なホームページのみであった。

3－5　「Inforseek」カテゴリ

Yahoo!JAPAN」「goo」とともに日本の検索サイトとして歴史を持つ「Inforseek」（現在は楽天が運営）でも同様に調べたところ、2003/12/10時点で「父親」で10件のホームページが登録されていた。カテゴリは「暮らし＞人々と文化＞家族＞父親」であり、内容は、パパの育児日記、エッセー、コラムといった既出のカテゴリにも登録されていたホームページだけでなく、「主夫適応度チェック」や「男性保育士による育児教室」といったInforseek独自の観点で採用したホームページが見られた。

4．ポータルサイト独自の取り組み

以上に挙げた検索サイトは、通常「ポータルサイト」とも呼ばれる。これらのサイトは、パソコンを起動させ、インターネットを始める時に最初に表示されるページ（スタートページ、もしくは「ホーム」）としてユーザに選ばれるようにメインサービスとなる検索以外のサービスを充実させ（たとえば、オークションを開催する、ニュース記事を掲載する、Webメールを使えるようにする、など）ている。

そのサービスの1つとして、独自に「子育て」に関する情報をまとめたページや「子育て」について語り合うことができるコミュニティのページを作っているところもある。

そこでは、現役の園長先生や幼稚園教諭・保育士、小児科医や子育てに関する研究者などが、訪問者へのアドバイスを行ったり、コラムを寄稿したりしている。

以下、各検索サイトが行っている子育てに関する独自の取り組みについて見ていくことにする。

4－1　「Yahoo! JAPAN」

「Yahoo!掲示板」では「家庭と住まい＞家族＞父親」というカテゴリを設け、掲示板形式で意見交換できるページがある。その他には特にコンテンツは見当たらない。

4－2　「goo」

「goo ベビー」というサイトがあり、「ベビーパパ向け育児コンテンツ」が女性用と並列して存在する。「パパ向け」コンテンツの内容は、妊娠や出産法、赤ちゃんの成長についての知識をまとめたもの、妻への接し方講座などである。また、会員登録さえすれば掲示板にも参加が可能になっている。

さらに、男性と子育てという観点で言えば、「イケメン★子育てアカデミー」というコンテンツがあった時期もあった。そこでは、男性保育士4名（船堀中央保育園（東京都江戸川区））が子育て相談に乗るという企画が行われていた（2004年8月の時点では企画はすでに終了している）。

4－3　「Excite」

「エキサイトサークル」というメンバーを募って語り合うようなコミュニティのページがあるが、特に父親関連のサークルがある様子ではない。非公開のサークルも存在するので、確認できないだけで、父親関連のサークルもあるかもしれないが、公開性のものは2004年9月時点では存在しない。

4－4　「Inforseek」

特に独自の取組はない。チャットができるコミュニティも存在するが、特に父親が子育てに関して語っているようなコミュニティも、2004年9月時点では存在しないようである。

4－5　「All About Japan」

検索サービスを中心に行っているわけではないが、様々なジャンル1つひとつに担当者とも言うべき「ガイド」という人物を立て、その情報を集めたリンク集を形成したり、そのジャンルに関連するニュースを集め、コメントしたりしながらページを作っているホームページである。現在、ユーザたちの注目が集まっているようであるので、取り上げておくことにした。

この「All About Japan」には、「幼稚園・保育園」のカテゴリ（http://allabout.co.jp/children/kindergarten/）がある。そのカテゴリは、『「もっと育児に関わりたい」と思っていても、なかなか身近な人とは話が合わない。そんなパパはぜひネットで情報交換を』という紹介文で始まる。まさに、「父親の子育て」にターゲットを絞ったホームページである。

このホームページでは、「育児中のパパのためのサイト」を集めたリンク集を作ったり、ガイドとよばれる人物（吉森福子氏）が、子育て全般に関する話題を提供したり、ニュース記事を解説したり、アンケートを取ったりしている。

興味深いのは、このサイトで行われている「今日の一票」というアンケートコーナーで2003/09/05～09/25にママ向けに行われた「パパの育児参加、満足してる？」というアンケートの結果が以下のような状況であったことである。

表1　パパの育児参加、満足してる？

カンペキ！満足です	50%
忙しいので、現状が限度かな	25%
今より、もう少しはできるはず	25%
期待するのはやめました	0%

（http//allabout.co.jp/children/kindergarten/poll/mpollresult.htm）

5．企業や父母・幼稚園・保育園関係者による子育て支援サイト

以上より、各検索サイトで独自の視点で採用しているホームページもあるが、特に父親の子育てに関連性の高そうなホームページは、「幼稚園、保育園、託児所」のカテゴリ直下にある「父親」に関連があると「Yahoo！JAPAN」が判断し、登録しているホームページであることが明らかになった。また、父親の子育て関連するということで登録されているホームページは、「Yahoo!JAPAN」もしくは「goo」のどちらかを含む複数の検索サイトにも登録されていることが明らかになった。

それらのホームページのうち、子育て関連企業

および幼稚園・保育所関係者や子育て中の父母有志が作成し、特に父親に向けて書かれた記事が見られたものや、父親が参加しているホームページを5つ挙げてみた。以下に、趣旨を概観する。

5－1　i-子育てネット

http://www.i-kosodate.net/

厚生労働省の補助により財団法人こども未来財団が運営している。保育所検索、全国児童相談所一覧、子育て用語辞典、育児アドバイス等がある。父親に関するコンテンツは「ドキュメント　パパと子のフォト日記」「パパの子育て体験記」「男の子育て、ご意見交換」などである。また「フォーラム」には、さまざまな子育てに関してのテーマに対して、父親からの投稿も見られる。

5－2　キッズインフォメーションサービス

http://www.ans.co.jp/kis/

「園児と父母と幼児教育にたずさわる人のための」ホームページと謳い、幼稚園、保育園の情報を中心とした園児と父母と幼児教育にたずさわる人のためのページである。特に、日本の幼稚園・保育園の制度的な紹介、ホームページのある幼稚園・保育園と関連する協会・機関を紹介（リンク集と園情報中心）している。特に父親に特化したコンテンツはないが、一貫して「父母」という単語を使い、子育ては父も母も行うものだという姿勢が見られた。

5－3　全国保育園ふぼねっと

http://www.hoiku-fubo.net/

保育園関係者（男性保育士）および子ども（保育園・幼稚園・小学校）を持つ父母有志、12人で運営している。内容は、保育園、制度、問題、取組の紹介、掲示板が主である。会則もあり、情報交換が中心である。リンク集「がんばれ！父母のネットワーク」には「父母連&父母のネットワークリンク集」や「たった一 人から始められる保育運動」「メーリングリストリンク集」などがあり、子育ての実情だけでなく、行政や社会に訴えていこうという強い意志も見られる。

5－4　保育ing

http://www.hoiking.com/

株式会社システムプロシードが運営をサポートしており、「Team PaM（PAPA & MAMA）」という子育て中のパパ・ママで内容を構成しているホームページである。「保護者（パパ・ママ・ご家族の方）と保育者（幼稚園・保育園の先生）と子どもたちを繋ぐサイト」と趣旨を説明し、「ベビーからキッズへ、子どもたちの成長とともに、パパもママも先生も、みんなでステップアップしていくためのサイト」と理想の子育てと父母像を掲げている。コンテンツは育児に関する相談、掲示板、保育園、幼稚園検索等で構成されている。

掲示板はママの投稿ばかりだが、「パパママホームページ」には父親が作るホームページへのリンク、「パパママアンケート」では、父親についてのアンケートが掲載されており、父親向けの内容も取り込もうとしている様子がうかがえる。

5－5　保育のあれこれ

http://www.asahi-net.or.jp/~tr8k-akym/hoiku.htm

保育園アンケートの実施とその結果、保育の質等を考えるホームページ。 子育てを経験した男性が運営し、コラムを書いている。「子どもを持つ保護者」と書かれてあるが、アンケートに関しては実際には回答者が母親であるものが多い。しかし、資料集のページとしての充実度の方が高く、父親が育児をする際の参考になるホームページであった。

6．父親の子育てに関する白書・新聞記事サイト

新聞記事に関するサイトは、その時々に新聞に掲載されている内容の全文または要約文が書く新聞社のホームページに掲載されている。例えば、毎日新聞2002/10/22「子育て調査　父親の3割が子供の相手　育休取得は1％未満」（http://www.mainichi.co.jp/women/news/200210/22-3.html）など。「21世紀のお父さんの約3割が、どんなに忙しくても家で子供の相手をする一方、育児休業の取得率は1%未満――」という記事で、厚生労働省の「第1回21世紀出生児縦断調査」が21日発表され、昨年子供が生まれた世帯の育

児実態が明らかになった」。掲載時期が古くなると削除され、閲覧はできなくなるが、各新聞社が出しているアーカイブCD-ROMなどを通して、図書館等で閲覧可能である。

また、白書に関しては、厚生労働省や総務省関連のものだけでなく、例えば、ソニー教育財団による『家庭教育研究白書』第4回白書『現代の父親と子育て』（http://www.sony-ef.or.jp/eda/study/committee/hakusho04.html）のが閲覧可能である。ここでは、白書のほか、子育てリーダー支援、子育て広場を開設し、コミュニティも形成している。

7．父親による子育て日記サイト・男の子育て支援サイト

「Yahoo! Japan」をはじめ、父親自身による「父親の子育て」に関する記述が見られるホームページについて、概観していく。

父親の子育てに関するホームページでカテゴリに登録されているホームページ、また、それらのホームページからリンクされているホームページを見ていると、1998年から2000年あたりまでに最も精力的に更新しており、現在は更新が止まっているホームページと、最近始まったホームページ、もしくは1998年あたりから更新はしているものの、一旦更新を停止していて最近復活した、もしくは、その当時より現在、精力的に更新中のホームページの2つに大別されることが分かった。

このように、1）1998年から2000年に最も活動的だったホームページ、2）現在（2002年後半から現在に至る）に最も活動的であるホームページ、と、年代によって分けられることができる2種類のホームページのそれぞれにどのような特徴があるのだろうか。

酒井（2004）は、1996年から2003年の8年間の新聞記事の中から、「父親の子育て」に関する新聞記事数の推移を調査している。その結果、1998年がピークで、その後年々減少し、育児休業法の改正があった2002年に記事数が一度増加し、また記事数が減少していることが分かっている。

新聞の記事数と、更新が頻繁に行われ意見や感想が盛んに書かれていたホームページの数とを単純に比較すると、新聞記事が減少している時期にホームページの数は増加し活発化しているが、新聞記事が増加する時期には、ホームページは沈静化していたことが分かる。

酒井（2004）は、新聞記事の増減について、一番記事数の多かった1998年の厚生白書がメインテーマに「少子社会」を据え、父親の育児参加を強く求めたという社会背景を理由に挙げている。また、2002年の一時的な記事数の増加も、育児休業法の改正が行われた年であるという社会背景を理由に挙げている。

新聞やマスメディアがこのような社会背景にいち早く対応するのに対して、インターネットというメディアは、ニュースを伝達するだけでなく、むしろ私たちにとって、現代社会に生きている私たちを含めさまざまな一般市民である個人たちが、自ら生の声を挙げるメディアであるという特徴がこの現象を生み出していると言えよう。

インターネットが、個人が生の意見を表現し、伝達することができるメディアであるからこそ、新聞記事数の後追いをするような変化を見せているのではないだろうか。社会が変化し、その影響を受けながら生きている個人たちのさまざまな様子や意見が表現されるためには、どうしても新聞の記事数の増減、すなわちニュース性よりも一歩遅れる形になることは容易に推察できる。

では、1998年から2000年に書かれたホームページの内容と、現在書かれているホームページの内容とは、どのような違いがあるのだろうか。以下から、具体例を見ながら分析していく。

7－1　1998年～2000年あたりに最も精力的に更新していたホームページ

政府広報に厚生労働省が「育児をしない男を，父とは呼ばない」というフレーズで当時人気だった安室奈美恵の夫TRFのSAM氏と子どもを起用したポスターが世に出た時期が1999年末のことであった。先ほどの「1998年～2000年」という期間は、ちょうどこのポスターの前後にあたる。インターネットという当時新しかった手段を用いて、子育てに関して父親として持っている意見や、自分の体験に基づく意見を世間に幅広く伝え、交換しあいたい父親たちにとって好機だったのかも

図1　政府広告のポスター

しれない。

ホームページを見てみると、このSAM氏のポスターのキャッチフレーズについての意見を述べていたり、電子掲示板を使って訪問者との意見交換を行っていたりしたところもあった。

また、少子化対策として政府が策定した「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）」が策定されたのが1994年12月であるが、このエンゼルプランの一環として策定された「緊急保育対策等5か年事業」（1994～1999年度）で設定された数値目標の最終結果が待たれる時期でもあった。また、1999年12月には「少子化対策推進基本方針」が定められ、これに基づいた「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について（新エンゼルプラン）」（2000～2004年度）が発表された時期でもある。

つまり、育児休暇を取ることができるようになり、育児休暇を父親も取ろうというスローガンが掲げられ、大々的に世間にアピールされたこの時期の前後に更新が頻繁になされた、ということになるのではないか。

したがって、ホームページの内容も、「育児休暇の取り方」「実際に取ってみての体験記・日記」がほとんどで、また、育児休暇を取っていない父親のホームページであっても、このような社会・時代背景を受けて「これから、社会はどうあるべきか、父親の子育てはどうあるべきか」という主張中心のホームページがほとんどである。

中には、新聞に連載された手記をまとめたホームページもあったり、逆に、ホームページの日記や手記が新聞に掲載されたりという現象も起きていることが明らかになった。

なお、ホームページの主宰者、つまり手記や日記、コラム等の著者について調べてみると、育児休暇を取りやすい、または比較的仕事で自由が利く職業の人たち、例えば学校教師や大学教員、システムエンジニアなど、また、外資系の会社社員、新聞・雑誌記者など、男性の育児休暇に対して比較的理解を示していたり、育児休暇を取り体験談を書くことが仕事の一環になっていたりするような人が多いことが分かっている。また、ほとんどが核家族であった。

この主宰者についての肖像は1998年に前田が小学校3年生以下の子どもを持つ父親に行った「共働き世帯における夫の家事・育児分担についての分析」調査結果とも一致している（前田：2004）。つまり、ある程度、性別による分業観よりもむしろ、父親に時間的な余裕があることが子育てに向かわせるということである。また、前田の分析からは「夫の家事・育児分担の促進のためには、夫に時間的余裕を持たせるような政策的対応が必要である」という結果が出ているが、日記や手記、コラムの主張より、同じような意見が多く出ていることも明らかになった。

さらに、松田（2002）の「わが国における父親の育児協力の規定要因」の結果からも、「時間的余裕があること」「より幼い子どもがいる（＝育児に手間がかかる）こと」が父親の育児協力の大きな要因となっていることが明らかになっている。時間的余裕があるという結果については先述したとおりだが、ホームページで見られる父親が育児をしていた子どもの年齢は、育児休暇を取っている期間、すなわち子どもがより幼い時期のことを書いているものばかりで、松田の結果と一致することも明らかになった。

「父親として育児をする」立場の男性たちが、「育児」を通して、意見を述べたり、意見を交換し合ったりしたいと思った時、また、自分の体験談をより多くの人たちに伝えたいと思った時と、インターネットという当時新しかった表現媒体の存在が合わさった結果、特にこの時期にホームページがにぎわったのではないだろうか。

7－2　1998年～2000年あたりに最も精力的に更新していたホームページの事例

この時期に、新聞やテレビニュースと違い、個人が、自分の思いや意見を表現することができるメディアであるインターネットを用いて、「父親

の子育て」は誰がどのように書いていたのかをさらに具体例を挙げて概観する。

（1）「男の育児」

http://kurashi.hi-ho.ne.jp/ikuji/papa/

石川由喜夫氏（文）、市谷健氏（写真）による、父親の育児について意見を体験談から述べているホームページ。

「育休パパや出産立ち会い夫、ちょっと待った！父親とは、妻を手伝い主夫になることではない。男たちよ、男にしかできない育児に、さあ、本領を発揮しよう！」がコンセプトである。このホームページは、パナソニック Hi-Ho が主宰する「KURASHI Web」のコンテンツの1つとなっているので、個人ページと分類するには問題もあるが、「KURASHI Web」と独立して語られることも多いので、ここで扱うことにした。

具体的な内容は、母親の妊娠から子どもが3歳児になるまでのコラムや、読者との談話室などである。1999年から2000年（主に1999年）に書かれたものであり、現在は更新されていない。

ただ、「談話室」と呼ばれる掲示板形式のコミュニケーションの場では、現在でも若干ながら男の育児についての話をし、夫婦と子育てを描いていたドラマ「僕と彼女と彼女の生きる道」についての感想を男の子育ての視点で感想を述べ合うものなどが書き込みされている。

（2）「お料理ひよこ組」

http://www.eqg.org/~wakita/

1997年10月2日～1998年1月29日まで、朝日新聞朝刊 家庭面（毎週木曜）に連載していた「育休父さんの成長日誌」を書いていた脇田能宏氏のホームページ。当時の連載記事（および、それらをまとめた同名の本）や、父親の育児・育休に関するアンケート調査などで構成されている。現在もアンケートを中心に更新されているが、育児日記は更新せず、当時のものをそのまま掲載している。

（3）「レッシーパパの家」

http://www.geocities.co.jp/SweetHome/1925/

ハンドルネーム「レッシーパパ」氏のホームページ。コンセプトは「育児中のパパ・ママも、これから育児する人も、"What To"を大切にした育児のページ」で、「特に育児パパの輪を広げたい！」と明記されている。

育児に関する意見を述べた部分と、実際の育児日記にあたるような部分、そして、育児情報交換や相談を目的とした訪問者との交流の部分により成り立っている。また、メールマガジンを活用し、訪問者となる他の「父親の育児」に興味を持っている、もしくは当事者たちとの結びつきを強めようともしていた。

（4）その他

1998年6月13日に開設され、更新は2001年7月31日でストップしているホームページで、ハンドルネーム Kageken 氏の「働くママパパのホームページ」（http://www2s.biglobe.ne.jp/~kageken/）は、父親から見た育児について書かれた「とうちゃんのひとりごと(育児体験記)」をはじめ、働きながら育児をする父母のための法律解説などが掲載されている。

また、高校の国語教師のハンドルネーム猫之介氏による「育休父ちゃん猫之介お気楽子育て記」（http://www.ne.jp/asahi/nekonosuke/hp/）も、本人が育児休暇を取った1998年の日記を掲載しており、現在は更新されていない。しかし、同じように育児をする父親の日記をリンクで紹介しており、そのリンク先には今現在更新中のサイトもある。

7－3　現在、精力的に更新中のホームページ

最近になって増えてきたホームページは、前述の時期の男性たちのように、育児について意見を述べるサイトだけでなく、アルバム公開のような形で娘や息子とのやりとりのエピソードを公開するサイトが多いのが特徴であることが明らかになった。

これには、インターネットが生活の中に浸透してきたことや、前述の時期に比べて、情報技術が進化し、ホームページの作成も随分と簡単になったことも大きい要因である。従来はHTML言語を習得し作成していたが、安価で簡単なホームページ作成ソフトウェアを用いたりして作ることがで

きるようになったからである。

また、現在は「Weblog」と呼ばれるのホームページ形態の登場が、さらに「父親の育児」日記のホームページの増加に拍車をかけている。

「Weblog」とは、別名「blog」また「Web日記」とも呼ばれる、個人運営で日々更新される日記的なホームページの総称である。自分のWeblogに日記やコラム、また情報を掲載することで、他のメディアを介さずに「生の」情報が流通するので、訪問者との交流も行われやすく、時としてマスメディアからも逆に注目されるような大きな意見となることもある。

このような現象が起きるのは、従来のホームページにはなかった、書いた内容が広く一般に公開されており、他のホームページからリンクされたり論評されたりしやすいようなシステムを内包していることが大きい。以前のように、日記コーナー、掲示板コーナーと分けず一括管理し、全部まとめて表示し、閲覧できるというメリットを持っているのである。

また、多くは「Weblog」を使うためにユーザ登録するだけで簡単にホームページを開設することができ、従来のような知識を必要とすることなく、ワープロを打つ感覚でホームページが更新できるのも大きな特徴である。最新のWeblogでは携帯電話からも更新できるようになっている。したがって、カメラ付き携帯電話を使うと、文章だけでなく、簡単に写真も掲載することができるのである。

子育て日記が気軽に書くことができ、更新も続けやすくなったため、検索サイトのカテゴリに掲載されていない、普通の育児日記が数えることができないほど多く生まれる結果となった。

また、「父親の育児日記」と銘打たなくても、父親である主宰者が、通常の日記の中で、ある日だけテーマを「育児」にすることで気軽に育児についての意見を書くことができ、それらが検索結果に反映され、他の多くの人たちに広めることができることも大きい。たとえばLivedoor社が提供している「Livedoor Blog」を使っている人たちの記事全体から「父　子育て」（AND検索）で検索すると2004年9月10日時点で71件のWeblogが見つかり、読むことができる。また「パパ　子育て」（AND検索）にキーワードを変えて検索すると143件のWeblogが見つかる。

さらに、Livedoor社の検索エンジンを使って、同じ日にWeblog全体から「父　子育て」（AND検索）で検索した結果、370件のWeblogが、また「パパ　子育て」（AND検索）で検索すると1091件のWeblogが見つかった。

現状では、父親が自分自身のことを書いた日記がどれかを探すのは至難の業であること、また、この検索結果も日に日に変わっていくこと、さらに、テーマを個人が毎日自由に変えることができることなどから、このようなWeblog形式の「父親の子育て」に関するホームページの事例を挙げて考察するのは難しく、今後の課題にしたい。

そして、このような形式のホームページの登場は、今までの「父親の子育て」に関する強い主張や意見を反映させた記述のものだけでなく、気軽に「父親の子育て」について意見や感想を述べた記述が主流になってきていることを意味している。アルバムを作るように、携帯電話のカメラやデジタルカメラを使って写真を掲載し、簡単な一言を添えるような父親のホームページも多く見られるし、普段の父親の子育ての様子を、父親自身から記述したものだけでなく、母親の目から見たものなども多く見られることが分かってきた。

個人が簡単に情報を発信したり、意見を述べたり、感想を気軽に書くことができるツールと技術の発展が、現在の「父親の子育て」の姿をよりリアルに、父親どうしが身近なものとして閲覧し、交流できるようになってきた結果が、現在の「父親の子育て」のホームページの増加と発展につながっているのではないだろうか。

父親たちの意識も、「育児休暇をどうするか」「社会に向けての意見」といったテーマ性が見られるものもあるが、多くは子どもとのかかわりの中で生まれたエピソード記述で、携帯電話の写真で撮った画像を掲載したり、日常の中で子どもと関わりながら感じたことや思ったことを気軽に書いたりしているところから、「可愛い子ども自慢」や「子育てを楽しんでいます」「子育てタイヘンです」といったライトな感覚のものになってきているのではないだろうか。ホームページ上で見られる現代の子育てをする父親の姿が、1998年頃

のホームページの主宰者たちの姿とはまた違った形で見ることができる。当然、主宰者も、育児関連の仕事をしている人や幼稚園・保育所の関係者ではない、普通のお父さんによる育児日記の方が圧倒的に多くなってきている。

しかし、現在も更新している育児サイトの中には、1998年頃から、育児休暇を取っている期間の日記、子どもが保育所に通っている頃の日記、小学校に行ってからの日記と、父親の育児状況や子どもの成長に合わせてサイトを整理し更新を続けているサイトもある。また、育児関連のWebLink（サイトを輪のようにつなげるリンク集）を作っているサイトもある。

7－4　現在、精力的に更新中のホームページの事例

現在、精力的に更新されているホームページの多くはWeblog形式を取っているものが多いが、中には、1998年前後からホームページを開設しており、一部は従来までの形態を取り、一部をWeblogにして現在も精力的に「父親の子育て」についての意見を述べたり、日記を公開したりしているホームページもある。その中から「Yahoo! JAPAN」等のカテゴリに掲載されているものをいくつか挙げて概観する。

（1）「父ヒロシの育休日記」

http://www5a.biglobe.ne.jp/~gan/

育児休暇を取って子育てをしたハンドルネーム父ヒロシ氏が、自身の育児日記を綴ったホームページである。育休期間の日記は「育児日記」のページにあり、2000年に更新を終了している。その後、2004年3月（長男が保育所を卒業した）まで、復業後の育児をつづった日記「保育所的日々」を更新し、現在は「小学校連絡帳」として小学生になった長男と保育所に通っている長女やとのできごとの更新を続けている。

なお、このサイトは2000年から2001年ぐらいの間に、数多くメディアの取材を受けたり紹介されたりしている。

（2）「ルーパパねっと」

http://lupapa.net/

ハンドルネームルーパパ氏による、子育て日記を中心とした個人ホームページ。子どもの成長、子どもと遊んだり話したりして感じたことなどの記録が中心となっている。現在は、Weblogを使って、他の人たちとの意見交流が行われている。

（3）「Father's Angel～新米パパの子育て大好き～」

http://sky.or.tv/angel/

2002年8月産まれの一人息子を持つ、自称、新米パパのハンドルネーム月光氏が運営する参加型育児ホームページ。自分の体験に基づく日記の公開だけでなく、Web上にあるさまざまな育児日記をつなげる「育児日記WebLink」などもある。WebLinkに登録されているサイトには、男性による育児日記サイトも数件みられる。

（4）「あかまんまみ～あ」内「リアルタイムパパ日記」

http://www.akamama.co.jp/sku_papadiary.html

株式会社赤ちゃんとママ社が開設しているホームページでは、同社が出版している雑誌『赤ちゃんとママ』に関する記事を中心に、主にママに向けた子育て情報を月2回の更新ペースで提供している。しかし、数あるコーナーの中に、レギュラーの更新とは別に不定期に「リアルタイムパパ日記」というものがある。

このコーナーでは、2003年4月から同社の男性若手社員2名が、それぞれ自分が育児にかかわったり、育児について思ったりしたことを日記として公表している（中には普通の日記もまじっている）。

この「リアルタイムパパ日記」を書いている一人はハンドルネームチンちゃんパパ氏で、「チンちゃんパパの新米パパ日記」というタイトルで日記を書いている。書き始めた当初は「チンちゃんパパのプレパパ日記」というタイトルだったことからも分かるようにまだパパではなく、奥さんの出産を1ヵ月後に控えた状態の「もうすぐパパ（＝preパパ）」状態であった。現在は1歳の息子のパパである。

もう一人は、ハンドルネームまあくん氏で、こちらは新米パパに対して「まあくんの先輩パパ日記」というタイトルで、日記を書き始めた2003年4月時点で1歳7ヵ月の娘のパパだった。

幼児教育や保育の出版社の社員の日記ではあるが、内容は、最近多い「普通の子育ての1ページ」を語るものが多く、園への送り迎えの話、子どもが病気になった時の話などである。

8．インターネット上で見られる「父親の子育て」のまとめと今後の課題

インターネット上では、気軽で安価に個人が自分の意見や日記を公開することができるため、マスメディアでは取り上げられないような事例や経験談、実感・本音が発信されており、その発信したものに対して訪問者や閲覧者がさらに反応している、という現象が見られる。

「父親の子育て」に関しても、父親自身がインターネット上でホームページを作成していくことで、育児休暇の必要性や、具体的にどうすればよいのかというハウツー、本音などが新聞やテレビと並行するというより、むしろ忘れた頃や落ち着いた頃に語られ、発信されていたことが明らかになった。さらに、一時落ち着きを見せるが、社会の変化だけでなく、ホームページ作成労苦の軽減化や、インターネットをはじめとする情報機器や技術の進歩などにより、より手軽に、より身近で具体的な話題を掲載し、子育てを大変ながらも楽しんでいる父親の姿がインターネット上で数多く見られることが明らかになった。

事例を概観すると、初期に多かった「育児休暇が取れるような社会・体制の必要性」「家庭を大事にすることができる価値観の浸透」を述べているものだけでなく、現在では「やってみると楽しいですよ」と呼びかけるような雰囲気のものや、汐見（2003ほか）が述べるような「よい父親になるにはよい夫になることだ」という意見も多くのホームページから見られることが分かった。

父親自身が気軽に子育てに参加でき、それをインターネットという媒体を使って公表できるという状況が生まれた背景には、社会の高度情報化だけでなく、少しずつ父親が子育てに参加する土壌が生まれつつあるのではないかとも思わせる。

しかし、初期に多かった「育児休暇」に関する記述が現在ではあまり見られないことから、忙しく、少ない家庭での生活時間の中で、触れ合ったり写真を撮ったりしながら子育てに少し参加しているという父親の現状も見えてきた。

初期の頃に見られた、マスメディアとインターネットとの相互掲載をはじめとする両者の関係が今後どうなるのか、またWeblogの登場で、欧米で見られるようなインターネットでの情報発信がマスメディアを凌駕する時代がくるのか、今後の動向を見ていくことで、父親の子育ての変化と社会の変化の詳細が浮かび上がってくるのではないだろうか。

2002（平成14）年に厚生労働省は、これまでの少子化対策のどこが不十分なのか、また、更に対応すべきは何なのかを改めて点検し、日本の子育て支援に対して具体的な取組や育児休業取得率の数値目標を掲げた「少子化対策プラスワン―少子化対策の一層の充実に関する提案―」が発表された。このような政策による社会の変革の中、父親の子育てがよりよい形で促進されるようになるにはどうすればよいのか、父親自身や家族の本音による日記や手記、情報をインターネットで情報発信している姿から捉えなおすことで、父親たちの育児について、マスメディアや統計では得られない示唆が得られるのではないだろうか。

そのためには、今回のようにホームページの数だけで概観するだけではなく、より詳細な内容分析の必要があるだろう。

＜引用・参考文献等＞

国立社会保障・人口問題研究所編（2002）『少子社会の子育て支援』東京大学出版会

前田正子（2004）『子育てしやすい社会　保育・家庭・職場をめぐる育児支援策』ミネルヴァ書房

松田茂樹（2002）「父親の育児参加促進策の方向性」国立社会保障・人口問題研究所編『少子社会の子育て支援』東京大学出版会、313-330

内閣府（2003）『若年層の意識実態調査』

酒井美佳（2004）『新聞記事に見る父親像』大阪教育大学教育学部幼稚園教員養成課程卒業論文

汐見稔幸（2003）『お～い父親 Part1［子育て篇］』

大月書店
汐見稔幸（2003）『お～い父親 Part2［夫婦篇］』大月書店
汐見稔幸・長坂典子・山崎喜比古（1999）『父親手帖　お父さんになるあなたへ』大月書店
汐見稔幸・田中千穂子・土谷みち子（1999）『父親手帖 Part2 乳幼児　お父さんになったあなたへ』大月書店
神戸新聞 2000 年 11 月 25 日付「市職員が育児日記公開」
神戸新聞 2002 年 9 月 8 日付「家庭欄　男の育児休業泣き笑い」
読売新聞（大阪）2000 年 8 月 3 日付「元気ですかお父さん（4）・施行錯誤した育児休暇」
読売新聞（大阪）2000 年 8 月 10 日付「元気ですかお父さん（5）・2 人でカバーすればいい」
「39papa.com」http://39papa.com/（アクセス: 2003/12/10）
「あかまんまみ～あ」株式会社赤ちゃんとママ社 http://www.akamama.co.jp/sku_papadiary.html（アクセス: 2003/12/10, 2004/9/10）
「All About Japan」http://allabout.co.jp/（アクセス: 2003/11/18, 2004/9/10）
「All About Japan」「幼稚園・保育園」http://allabout.co.jp/children/kindergarten（アクセス: 2003/11/18, 2004/9/10）
「あなたの適応度チェック（主夫度チェック）」http://homepage1.nifty.com/midnight/analyze/（アクセス: 2003/12/10）
「Excite」http:www.excite.co.jp/（アクセス: 2003/11/18, 2004/9/10）
「Father's Angel～新米パパの子育て大好き～」http://sky.or.tv/angel/（アクセス: 2003/12/10, 2004/8/10）
「goo」http://www.goo.ne.jp/（アクセス: 2003/12/10, 2004/8/10）
「goo ベビー」http://baby.goo.ne.jp/（アクセス: 2003/12/10, 2004/8/10）
「働くママパパのホームページ」Kageken http://www2s.biglobe.ne.jp/~kageken/（アクセス: 2003/12/10, 2004/8/10）
「保育 ing」http://www.hoiking.com/（アクセス: 2003/12/10, 2004/9/10）
「保育のあれこれ」http://www.asahi-net.or.jp/~tr8k-akym/hoiku.htm（アクセス: 2003/12/10, 2004/9/10）
「保育士 TETSU の！パパの育児教室」http://www2.ocn.ne.jp/~papaclub/（アクセス: 2003/12/10）
「i-子育てネット」財団法人こども未来財団 http://www.i-kosodate.net/（アクセス: 2003/12/10, 2004/9/10）
「育休父ちゃん猫之介お気楽子育て記」http://www.ne.jp/asahi/nekonosuke/hp/（アクセス: 2003/12/10, 2004/8/10）
「Infoseek」http://www.infosee.co.jp（アクセス: 2003/12/10）
「家庭教育研究白書　第 4 回白書『現代の父親と子育て』」ソニー教育財団 http://www.sony-ef.or.jp/eda/study/committee/hakusho04.html（アクセス: 2003/12/10）
「キッズインフォメーションサービス」http://www.ans.co.jp/kis/（アクセス: 2003/12/10, 2004/9/10）
「Livedoor Blog」http://blog.livedoor.com/（2003/9/10）
「ルーパパねっと」http://lupapa.net/（アクセス: 2003/12/10, 2004/8/10）
「毎日新聞 2002/10/22『子育て調査　父親の 3 割が子供の相手　育休取得は 1 %未満』」http://www.mainichi.co.jp/women/news/200210/22-3.html（アクセス: 2003/12/10）
「お料理ひよこ組」脇田能宏 http://www.eqg.org/~wakita/（アクセス: 2003/12/10, 2004/8/10）
「男の育児」石川由喜夫・市谷健 http://kurashi.hi-ho.ne.jp/ikuji/papa/（アクセス: 2003/12/10）
「レッシーパパの家」http://www.geocities.co.jp/SweetHome/1925/（アクセス: 2003/12/10, 2004/8/10）
「父ヒロシの育休日記」http://www5a.biglobe.ne.jp/~gan/（アクセス: 2003/12/10, 2004/8/10）
「Yahoo!JAPAN」http://www.yahoo.co.jp（アクセス: 2003/12/10, 2004/5/20）

「全国保育園ふぼねっと」http://www.hoiku-fubo.net/（アクセス: 2003/12/10, 2004/9/10）

Nagoya Ryujo (St. Mary's) College, Annual Report of Studies, Volume 26, 2004

Description of "Father's Participates in Child-care" on the Web

Matsuyama, Yumiko*

For a society background; for example, the campaign for Father's Parental leave by Ministry of Health, Labour and Welfare, it is told in many cases about the father who participates in housekeeping and child-rearing. Although various opinions are flying about, what has it become in fact about a father's child-care?

In order to explore present-day "participates in child-care of father" image, the report was investigated the image, opinion and view of "participates in child-care of father" is written on the Internet.

In contrasts with the number of newspaper articles about "father's child-rearing", the result for the number and the updating frequency of the homepage on the web are as follows. 1) The contents of the homepage which was the most active from 1998 to 2000 is almost "how to take parental leave" and/or "the account of experience or diary which are actually engaging or participating in child-care". 2) The contents of the most active homepage at present (it results now from the second half of 2002) is becoming in use an ordinary father's own description which expressed an opinion and comment about "child-care of a father" freely using a system of weblog and taking "photo album or diary", "short essay".

From 1998 to 1999, description on the internet was effected and interacted with the contents of mass-media: newspaper or TV-show. In 2004, measure against the declining birthrate "Plus one" is adopted. For a built future better society, it is necessary to reconstruct a father's real opinion or figure about child-care participation by an analysis of description of father's real image on the web.

キーワード：父親，子育て（Child-Care by Father），インターネット（Internet, Weblog）

Nagoya Ryujyo (St. Mary's) College